横芝光町民ギャラリー企画展

鏡の歴史

鏡は何を映してきたか

はじめに

横芝光町は、千葉県東部、太平洋の波が洗う九十九里浜の中ほどに位置し、浜の後背に広がる九十九里平野には水田が展開し、少し内陸に入った下総台地には里山がこんもりと茂る、温暖で緑豊かな農村地帯です。そのような環境の中で町内には古くからの遺跡が多数分布し、昔から多くの人々の営みがあったことを示しています。それは首都圏に広がる開発の波が、昭和の終わりころから町にも及び、多くの遺跡の発掘調査によって明らかになりました。そうした中に町内の遺跡からは、和鏡と呼ばれる中世から近世に作られた銅鏡が出土し、その数は合計で10点余りにもなりました。10点というと決して多い数ではありませんが、県内他市町村と比較すると決して少なくありません。なぜ、横芝光町でこれほど多くの和鏡が出土したのか、それを皆様と一緒に考えるため、今回の展示を企画しました。

このほか、町内で個人的に所有されていた近世の鏡が町に寄贈されたり、また、個人的に収集し所蔵されている和鏡もあり、江戸時代には多くの鏡が町内で使われていたことが想像されます。それらも合わせて展示し、江戸時代の鏡の使われ方も顧みたいと思います。

そうしてみると、鏡はどのような歴史をたどってきたのかも考える必要から、日本でも最も古い鏡も見たくなります。県内では古墳から鏡が出土したものが最も古く、次いで香取神宮の神宝として収蔵されている唐鏡—海獣葡萄鏡—があります。しかし、日本には弥生時代から漢鏡や韓鏡が入っています。今回それらの町内では出土していないような古い鏡のうち、隣の山武市から古墳時代のものを、明治大学博物館からは漢鏡を借用し、展示することができました。個人所蔵では鳥喰の今関輝夫氏、越川忠氏には快く資料の借用についてご協力いただきました。ここに記して御礼申し上げます。

なお、本図録に掲載した鏡のうち所蔵者名を記してないものは、町所蔵の資料です。

（編集・執筆責任　社会文化課　道澤　明）

１．鏡の歴史

鏡といえば本来は顔を映すものでした。それは人類の歴史と重なると言われ、初めは水鏡に始まり、技術が進歩すると石を磨いて鏡にしたのが、メソポタミアや中国で現れます。次いで金属精錬が可能になると、青銅で作られるようになり、それが鏡の素材として長く続きます。現在のようなガラスを使った鏡は、1317年にイタリアのベネチアで、ガラス職人が発明したと言われます。そのような鏡が日本に入ってきたのは明治時代以降になり、町にも明治時代の床屋さんの鏡が残されています。

日本では、鏡が道具として現れたのは弥生時代に入ってからで、最初は韓鏡が伽耶から入ってきました。それに相次いで前漢鏡や後漢鏡が日本に招来され、宝物として珍重されました。日本でも初めは顔を映すものとして使われたと思いますが、鏡が光をも反射し、その眩しさから神秘性を感じたのかもしれません。また、鏡が丸いことから、円く輝くものとして太陽になぞらえたのかもしれません。弥生人は鏡を太陽神が宿るものとして考え、神器とするようになりました。今日でも神社のご神体として、本殿に鎮座している鏡も多くみられます。そこで中国から輸入するだけでは足りず、国内でも製造するようになり、径30㎝をこえる大きなものまで作られました。弥生時代から古墳時代に代わる頃、あの有名な邪馬台国の卑弥呼が現れ、魏から鏡を賜ったと言われ、それが三角縁神獣鏡かどうか論争が続いています。古墳時代にも国内で鏡が多く製造されましたが、それらは弥生時代のものほど大きくはありません。その一部が山武市の島戸境１号墳から出土した４面の鏡です。

古墳時代が終わり、国家が確立し奈良時代から平安時代初めには遣唐使が中国に派遣され、それとともに入ってきたのが唐鏡である海獣葡萄鏡や八稜鏡です。海獣葡萄鏡は香取神宮に国宝として１面あり、また、山武市でも市指定の伝世品が１面あり、結構日本にもたらされたようです。寛平６(894)年、遣唐使が停止されると、唐鏡が入ってこなくなりましたが、鏡の需要は衰えず独自に国内で制作するようになり、和鏡が生まれました。

平安時代に誕生した和鏡は、裏面の文様にこれまでの中国鏡にはない花や鳥などをあしらった図柄が使われ、当時の日本人の感性によって作られたものであることが分かります。大きさは10㎝前後で、非常に薄い作りで軽い鏡が特徴です。そしてこの頃の鏡の多くが、経塚に埋納されていました。また、この頃、鏡の鏡面に仏像を線刻して本尊とした御正体、鏡自体はなんでもないが鏡面にあてた反射光に仏像等が現れる魔鏡なども作られました。

鎌倉時代から室町時代の鏡も同様ですが、一部に漢式鏡をまねた図柄を取り入れたものがあり、篠本新台遺跡で２面出ています。また、図柄も定型化し、菊花や双鳥文様が増え、さらに鶴・亀・松・竹・梅をあしらい中国の神仙思想を表した蓬莱鏡が出てきます。この蓬莱鏡は安土桃山時代から江戸時代初めに盛んに作られ、今日も多く残されています。しかし、その蓬莱鏡を見ると、鏡面はあまり磨かれてなく顔を映すことは難しく、裏面の文様は彫が深く、全体に厚手に作られ、それまでの和鏡から比

較すると重くなっています。蓬莱鏡の多くは婚礼調度として作られたと言われますが、奉納用としても作られたと思われます。

江戸時代になると柄のついた鏡―柄鏡―が多く作られるようになります。柄鏡は室町時代に作られていますが、普及するのは江戸時代になってからです。柄鏡ははじめ鏡面が室町時代のものと同じくらいで、柄が長く作られています。それが江戸後期になると鏡面が大きくなり、柄は短くなります。裏面の文様は草木に家紋や文字を大きく入れた鏡、また富士山文様の鏡などがあります。柄鏡のほか、方形の鏡や小型の懐中鏡なども作られました。

明治時代になると、西洋からガラス鏡やその製造技術が輸入され、それまでの和鏡は急速に廃れました。町内の床屋さんでもすでにガラス鏡が使われていたことが、その資料で知ることができます。

今日では、鏡は顔を映すのみでなく、道路の反射鏡や自動車のバックミラー、望遠鏡、医療、測量など、身近なところから最先端まで幅広く使われ、その重要度は増しています。今後も鏡の歴史は、人類の歴史と共に続いていくことでしょう。

篠本城跡５号水場の鏡

篠本新台遺跡１号土坑の鏡

2. 町内出土の鏡

町内で出土した鏡は、諸々を集めると12面になります。和鏡が7面、そのほかは小型の懐中鏡です。その中で最も古いのは鎌倉時代に作られた鏡で、新しいものでは江戸時代の懐中鏡があります。出土したところは篠本城跡で4面、その隣の新台遺跡で6面、長倉の経塚から2面で、中世から近世初期の遺跡になり、ほとんどが何らかの形で埋納された状態で出土しました。

篠本城跡の鏡は、7の菊花散双鳥鏡が斜面下曲輪10号区画際の崖下から、8の洲浜秋草双鳥鏡は10号区画に隣接したところにあった5号水場の中から、古瀬戸花瓶の完品と共に出土しました。8はおそらく埋納したものと思われ、水場の性格と重要性がしのばれます。12の懐中鏡は9号区画21号粘土貼土坑の脇から出土し、使用中に落としたものかもしれません。

新台遺跡の鏡は、建物跡群からは外れた西側にあった浅い1号土坑から、5面すべてが出土しました。出土した時、鏡は全て表面を上にして、和鏡3面が等間隔にくの字に配置され、その中央外側脇に懐中鏡がありました。このようなことから、新台遺跡の鏡も埋納されたものと思われますが、どのような意味を持ってこの遺構に埋納されたか想像できません。この新台遺跡出土の2面と、篠本城跡出土の鏡には、二箇所ずつ孔があけてあって、紐を通して壁にかけて使ったと考えられます。

長倉経塚の鏡は、鉦鼓（双盤ともいう）と銭貨（寛永通宝）、カワラケと共に、塚中央部の盛土下の旧表土上から出土しました。16の亀甲地双鳥鏡は鉦鼓と合わさって曲物の箱に入った状態で、蓬莱鏡はその横に裏面を上に、その上に銭貨が載り、やはり曲物の箱に入った状態でした。このようなことから、鏡や鉦鼓は塚に埋納されたものであることが分かり、納経容器は出土しませんでしたが、それに代わるものかもしれません。

長倉経塚と埋納された鏡と鉦鼓

中国後漢代の鏡

1 **方格規矩四神鏡** 後漢 径 22.8 cm
明治大学博物館蔵

2 **内行花文鏡** 後漢 径 21.5 cm
明治大学博物館蔵

古墳時代の鏡

3　**連弧文鏡**　古墳時代前期
径 9.5 cm　山武市教育委員会蔵

4　**珠文鏡**　古墳時代前期
径 8.5 cm　山武市教育委員会蔵

5　**捩文鏡**　古墳時代前期
径 9.5 cm　山武市教育委員会蔵

6　**捩文鏡**　古墳時代前期
径 7.9 cm　山武市教育委員会蔵

町内出土の鏡

7　菊花散双鳥鏡　室町時代
径 9.0 cm　篠本城跡出土

8　洲浜秋草双鳥鏡　室町時代
径 11.2 cm　篠本城跡出土

町内出土の鏡

9　洲浜菊花双鳥鏡　鎌倉時代
径 10.3 cm　篠本新台遺跡出土

10　籬秋草文鏡　室町時代
径 11.0 cm　篠本新台遺跡出土

町内出土の鏡

11　瑞花双鳳鏡(擬漢鏡)　室町時代
径 10.4 cm　篠本新台遺跡出土

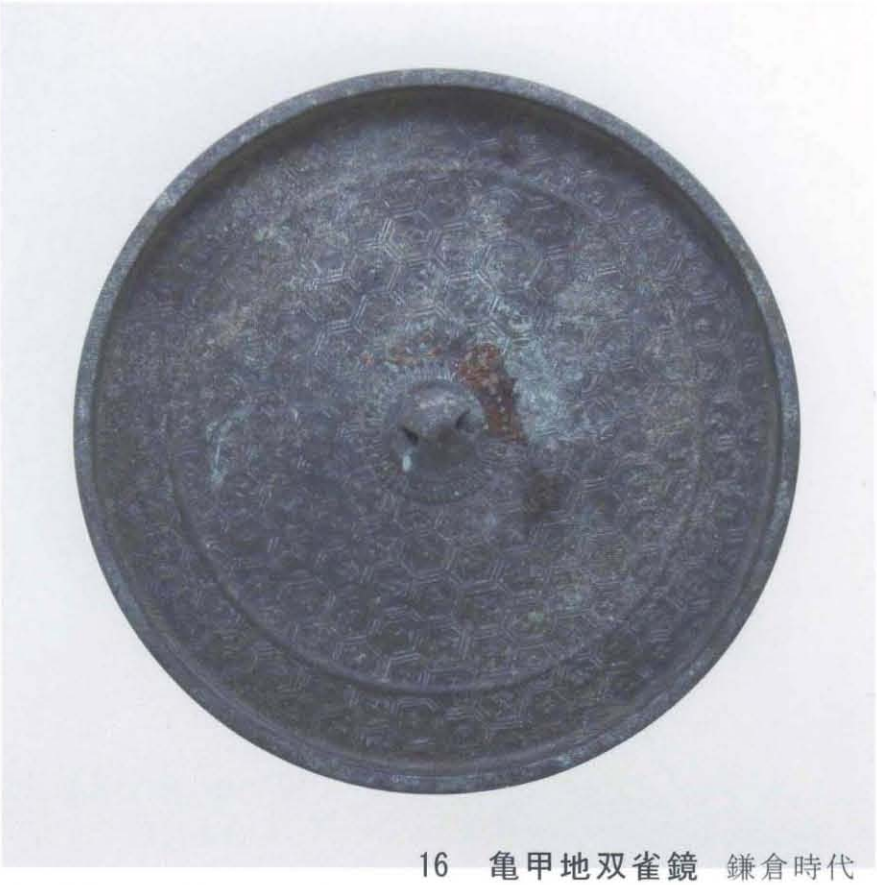
12　懐中鏡　室町時代
径 4.8 cm　篠本城跡出土

13　転用鏡（蓋）　室町時代
径 6.0 cm　篠本新台遺跡出土

14　懐中鏡　室町時代
径 6.3 cm

15　懐中鏡　室町時代
径 6.3 cm　2点篠本新台遺跡出土

町内出土の鏡



16　**亀甲地双雀鏡**　鎌倉時代
径 11.6 cm　長倉経塚出土

17　**蓬莱鏡**　江戸時代初期
径 11.6 cm　長倉経塚出土

中近世の鏡

18　蜘蛛巣文入籬秋草文鏡
鎌倉時代　径 11.3 cm
今関輝夫氏蔵

19　蓬莱鏡　江戸時代初期
径 12.1 cm　今関輝夫氏蔵

江戸時代の鏡

20　蓬莱鏡　江戸時代初期
径 12.1 cm　今関輝夫氏蔵

21　七宝繋紋地四目文鏡
江戸時代前期　径 7.1 cm
今関輝夫氏蔵

22　蓬莱鏡　江戸時代
径 8.3 cm　銘「藤原光永」
今関輝夫氏蔵

江戸時代の鏡

23　**菊花文柄鏡**　江戸時代中期
長さ 23.2 cm　銘「藤原定政」
今関輝夫氏蔵

24　**片喰紋花文柄鏡**
江戸時代中～後期
長さ 24.0 cm　銘「藤原重義」
今関輝夫氏蔵

江戸時代の鏡

25　**梅樹飛鶯柄鏡**　江戸時代中期
長さ 26.3 cm
銘「天下一播麻守藤原武次」
今関輝夫氏蔵

26　**蓬莱柄鏡**　江戸時代中～後期
長さ 25.9 cm　銘「藤原金益」
今関輝夫氏蔵

江戸時代の鏡

27　**玉川文字入草庵桜花柄鏡**
江戸時代中～後期
長さ 25.3 cm　銘「藤原光政」
今関輝夫氏蔵

28　**蓬莱柄鏡**　江戸時代後期
長さ 27.7 cm
銘「津田薩麻守定次」
越川　忠氏蔵

江戸時代の鏡

29　亀甲地蔦紋柄鏡
江戸時代後期　長さ 27.8 cm
銘「津田薩摩守家重」
今関輝夫氏蔵

30　福寿文字入宝尽柄鏡
江戸時代後期
長さ 33.5 cm
銘「天下一藤原政重」
越川　忠氏蔵

江戸時代の鏡

31　福寿文字入宝尽柄鏡
江戸時代後期　長さ 32.0 cm
銘「天下一藤原政重」
今関輝夫氏蔵

32　霧地懸鏡
江戸時代中期
径 13.1 cm

江戸時代・その他の鏡

33　福寿文字入鶴秋草文方鏡
江戸時代　17.0×6.2 cm
銘「天下一木村藤原義信」
今関輝夫氏蔵

33 の懐中鏡を入れた
錦裂製三つ道具入れ

上の三つ道具入れを
開いたところ

34　柳上川蝉方鏡　江戸時代
6.2×3.8 cm　銘「天下一」

35　龍文鏡（高麗鏡か）
13～14世紀
径 8.8 cm
越川　忠氏蔵

36　床屋の硝子鏡
明治時代

横芝光町民ギャラリー企画展図録

鏡の歴史

ー鏡は何を映してきたかー

発　行　日　平成２３年９月３日
編集・発行　横芝光町教育委員会
印　　刷　三陽工業株式会社